

一一ノ一六、重遊笠置山作並序

出典 巖居稿 公文書館内閣文庫に所蔵の和本。

解説 月譚は貞享丁卯（一六八七年）春に二回目の笠置登山を行い、二年後に笠置山記を完成させた。この際の記録がこの重遊笠置山作並序である。名文である。長い序文の後に漢詩がある。これを発展させたのが笠置山十題であろう。

原文

重遊笠置山一作並序

歳丁卯杪春庚寅ノ日、余踐テレ約ヲ訪フニ雲松律師ヲ於現光精舎ニ、翌日松公欲ス三導イテレ余ヲ再ヒ探ントニ笠置ノ之勝ヲ一、早粥罷テ乃欣然トシテ命シテ策ニ偕ナヒ行ク、路溯ッテニ木津川ニ而上ル、兩岨夾峙ッテ、一水縈紆タリ、如シレ経ニ歴スルカ于画図ノ中ニ、既ニレ行クコト十里余、矯レ首ヲ前ニ望メハ則有レ山、鬱然トシテ拔ト起スル於衆峰ノ之間ニ者ハ、即笠置山ナリ也、山ノ之麓トニ有リニ墟落一、居民鮮少ニシテ而風俗淳朴ナリ、野花開ケテ而芳馥アリ、幽鳥啼イテ而間関タリ、過者恍トシテ入ニ武陵桃源之境ニ、迤邐曲折漸ク登ルニ其巔ニ、首メニ抵シテニ南台ニ憩フニ文殊院ニ、院主与ニ松公ニ有リニ旧好一、喜シテ而接入ス、茗譚稍久シテ日将サニ午ナラント、院主具ナフニ香飯一、飯訖テ出テレ院ヲ北ノ方行クコト数百武而蒼檜四ニ環ツテ極ムニ其ノ幽閒ヲ一、有テニ古ノ招提ノ基ニ存ス焉、有リニ弥勒石一、高サ六丈許リ撐ヘテ天ヲ壁立、一平如シレ掌大士ノ聖影隱トシテ不レ可弁ス、相伝方ツテニ鼎盛ノ之時ニ穹窿傑閣蕩ニ摩ス雲煙ヲ一如シニ率陀宮ノ從リ空墜下スルカ一、逮シテニ元弘ノ国変ニ一、後醍醐天皇避ケテ玉フニ難ヲ於此山ニ、一夕兵燹俄ニ起ツテ紺宇灰燼ス、因テレ之ニ大士ノ像モ亦遭ルトニ燬損ニ云フ、又左ニ有リニ石壁一、高サ減スニ其ノ半ニ、上ニ鐫ルニ虚空蔵菩薩ノ像ヲ一、鮮明可レ觀ル、是レ蓋烈燄ノ所ナリレ不レ及ハ者ナリ、不レ知ラ、何レノ代ノ神僧カ為メニ諸ノ衆生ノ作スニ大饒益ヲ一、懋イカナ哉、厥ノ功永ク與トモニ此山一、不シレ朽チ也、又左ニ転シテ入ルニ一洞ニ一嵌巖中坵ケテ陰氣逼レ人ニ、既ニ穿テレ洞ヲ少ク進メハ則崖漸ク峻フシテ路益險、恠石・研トシテ敬チレ壑ニ、横フレ嶺ニ大ナル者ハ如クニ船舫ノ一、如クニ屋宇一、小ナル者ハ似ニ臥牛ニ、似ニ伏虎ニ、其ノ平ナル者ハ、可レ坐セシムニ百余人ヲ一、天造地設、神奇万状、非シハニ羅漢聖僧游息之所ロニ、則安ッ有シヤニ如キノレ是絶勝一乎、余與ニ松公ニ箕ニ跪シテ于盤陀ノ之上ニ、仰イテ觀ニ山色ヲ一、俯シテ瞰ニ溪流ヲ一、上下相映シテ、一碧如シレ藍、触レレ石ニ衝イテレ岩ニ、其ノ声雪霽然タリ、余語ッテニ松公ニ一曰ク、妙ナルカナ哉、此ノ境殆ント非スニ人間世ニ一也、曩シ解脱上人、視テ下夫ノ贗浮屠ノ徒ニ競ッテニ浮誇ニ一不ルヲ上遵ハニ戒律ニ一故ニ不レ喜ハニ與レレ此輩頡頏スルコトヲ一、破笠瘦筇自リニ宮掖ノ講筵一、直ニ遁ルニ此山ニ一、夔カニ絶シテニ人縁ヲ一、修シテレ道ヲ畢フレ世ヲ、距コトレ今ヲ四百有余載、遺風凜凜トシテ聞者、

孰カ不_レンヤ_ニ欽慕_セ一乎、然_ラハ則_レ人_ハ因_テ境_ニ而益傑_ニ境_ハ因_テ人_ニ而増靈_{トナリ}人_カ乎、境_カ乎、非_{スレ}同_ニ非_{スレ}異_ニ、由_テ是_ニ觀_レ之_ラ、山光雲影_ハ盡_ク頭_ハシ_ニ上人_ノ清淨法身_ヲ、溪声松籟_ハ無_シレ非_{ト云}コト_ニ上人_ノ広長舌相_ニ、見聞脱落_ハ触_ハ全_ク眞擬議_ニ纒_ニ生_{スレ}ハ遠_クシテ之_ノ遠_シト矣、松公唯唯_{タリ}、忽_チ見_テ夕陽_ノ下_ニ春_ニ急_ニ履_{ンテ}二_嶺岨_ヲ一而下_ル、及_{ンテ}歸_ルニ_精舎_ニ一、從_者具_ナヘテ_二鉛_槩一_索二_余カ_紀遊_ヲ一、因_テ賦_スニ_一律_ヲ一、

危蹊_數里_踏ム_ニ羊_腸ヲ_一、笠_嶠重_登レ_ハ興_轉タ_長シ、未_{タレ}問_ハ二_醍皇_停蹕_ノ処_ヲ一、先_尋ヌ_慶老_隱蹤_ノ場、溪_山画_キ出_ス眞_如ノ_境、花_木釀_{モシ}成_ス解_脱ノ_香、石_壁巉_巖奇_恠甚_タシ、卻_疑フ_身到_ルカ_ト二_鴈台_ノ陽_ニ一

読み下し文

歳、丁卯（二六八七年）杪春（春の暮れ）庚寅の日、余は約に_シ踐_テ（実行すること）雲松律師（後水尾天皇や東福門院とも關係を持つていて仏教教学全般に明るく、眞言密教や戒律、禪にも精通していた僧）を現光精舎（雲松は木津川市加茂町現光寺を再興）に訪_タぬ。翌日、松公、余を導いて再び笠置の勝を探らんと欲す。早粥を罷_テ乃_チ欣然として策_ヲ命_ジテ_一偕_ニ行く。

路は木津川を溯りて上る。両_岨夾_峙（両側からそばだつ）して、一_水縈_紆（うねりまがること）したり。画_図の中に経歴するが如し。既_ニ行くこと十里_余、首_ヲ矯_テ前_ヲ望_メば則_チ山_有り。鬱_然（こんもりと茂るさま）として衆_峰の間に拔_起するは即_チ笠_置山_也。山_ノ麓_ニ墟_落（むらざと）と有り。居民_鮮少（非常に少ないこと）にして風_俗淳_朴なり。野_ノ花_開きて芳_馥（芳しい香り）あり。幽_鳥（山_ノ奥_深く住_む鳥）啼_{いて}間_闕（鳥_ノ声_ヲ表_わす）たり。過_る者_恍（ぼんやりしているさま）として、武_陵桃_源（陶淵明_ノ物_語るところの仙境。桃源郷）の境_ニ入_る。

迤_邐（斜_めに行くさま）曲_折（折_れ曲_{がる}さま）して漸_ク其_ノ巔_ニ登_る。首_メに南_台に抵_リて文_殊院（笠置_山南_ノ峰、稻_荷社_ノ南_側下_ニあ_つた。今は畠_{とな}っている）に憩_う。院_主、松_公と旧_好有_り、喜_んで接_入す。茗_譚（茶_ヲ飲_み、話_ヲすること）稍_久くして、日_將に亭_午（正_午のこと）ならんとす。院_主香_飯を具_う。

飯_訖て、院_ヲ出_、北_ノ方_ヘ行_くこと數_百武（半_歩の長_さ、三_尺）にして、蒼_檜四（四_方）に環_つて其_ノ幽_閭（ひっそりと静_{かな}こと）を極_む。古_ノ招_提（寺_院のこと）。の基_有りて存_す（弥_勒石_前の本_堂付_近に礎_石の跡_が残_る）。

弥_勒石_有り。高_さ六_丈許_り。天_ヲ撐_テ壁_立す。一_平なること掌_ノ如_し。大_士（仏_ノこと。ここでは弥_勒仏）の聖_影隱_隱（薄_暗くものさびしいさま）として弁_ずべからず（あきらかでないこと）。相_伝（代_々伝_{わる}こと）に鼎_盛（最_盛期）の時_ニ方_つて穹_楼傑_閣雲_煙を蕩_摩す。率_陀宮（兜_率天。弥_勒菩_薩のいる天）の空_従り墜_下するが如_し。

元_弘の国_変に速_{んで}、後_醍醐_天皇_難を此_山に避_けたま_う。一_夕兵_燹（兵_火のこと）俄_{かに}起_つて紺_宇（仏_寺）灰_燼す。之_ニ因_りて大_士の像_も亦_燬損_に遭_うと云_う。

又左に石壁有り。高さ其の半ばに減ず。上に虚空蔵菩薩の像を鐫る。鮮明さ観る可し。是れ蓋し烈燄れつえん（激しい炎）の及ばざる者なり。知らず、何れの代の神僧が諸の衆生の為めに大饒益（大きな利益を与えること）を作したかを。懋うらやましい哉、厥その功、永く此山と與に朽ちざらん也。

又左に転じて一洞に入る。嵌巖かんがん（岩にできた洞窟）の中、圻さけて陰気人に逼る。既に洞を穿ちて少し進めば、則ち崖漸く峻うして路は益険しく、恠石・研として壑たにに欹そはたち、嶺に横たう。大なる者は船舫（ふね）の如く、屋宇（家）の如く、小なるは臥牛に似、伏虎に似たり。其の平なる者は（平等石を指すか）百余人を坐せしむ可し。天造地設、神奇万状は羅漢聖僧游息（くつろぎ、憩う）の所に非ずんば、則ち安いやすんぞ是の如きの絶勝（景色の優れたところ）有らんや。余、松公と盤陀（石がわだかまって平らかでないさま）の上に箕跪（ひざまずくこと）して、仰いで山色を觀、俯して溪流を瞰（見下ろすこと）る。上下相映じて、一碧の藍の如し。石に触れ、岩に衝いて、其の声雷雪然とどろき（とどろき、ひらめくさま）たり。余、松公に語つて曰く、妙なる哉、此境殆んど人間の世に非ず也と。

曩（以前）に、解脱上人、夫の贗浮屠（にせ僧）の徒いたずららに、浮誇（おごりたかぶること）を競つて戒律に遵わざるを視て、故に、此輩と頡頏けつこう（張り合うこと）するを喜ばず。破笠、瘦筇にて、宮掖（宮中）の講筵（講義する席）自り、直に此山に通る。復はるかに人縁を絶して道を修し、世を畢る。今を距ること四百有余載、遺風凜凜（畏敬の念を起こさせるさま）として、聞く者孰れか欽慕（うやまい、したうこと）せん乎、然らば則ち人は境に因つて益傑ますます（すぐれること）に、境は人に因つて増ますます靈となる。人か、境か。同じに非ず、異なるに非ず。是に由つて之を觀れば、山光雲影、尽く上人の清浄法身を顕わし、溪声松籟、上人の広長舌相（仏の三十二相の一つ。転じて雄弁）に非らずと云うこと無かれ。

見聞の脱落、触処（いたるところ）にあり、全ったくの眞に擬議（ためらうところ）纔たに生ずれば、之を遠くして遠しとするや。松公唯唯（承諾の言葉。ハイハイ）たり。忽ち夕陽の下春（日の暮れかかる頃）なるを見て、急に幘屐（山々）を履んで下る。精舍（加茂現光寺）に帰るに及んで、従者鉛槧えんせん（筆と紙）を具なえて余が紀遊を索もとむ。因つて一律を賦す。

危蹊数里踏羊腸 危蹊数里、羊腸を踏む

笠嶠重登輿転長 笠嶠（笠置の山道）重ねて登れば興おもむき転うた（いよいよの意）長し

未問醍皇停蹕处 未だ問わず醍皇（後醍醐天皇）停蹕（行幸）の処

先尋慶老隠蹤場 先に尋ぬ慶老（解脱上人貞慶）隠蹤の場

溪山画出真如境 溪山画き出すは真如の境

花木釀成解脱香 花木釀し成すは解脱の香

石壁巉巖奇恠甚 石壁巉巖（岩山が険しく高いさま）奇恠甚だし

卻疑身到鴈台陽

卻あおむきて疑う、身は鴈台（鴈山、中国山西省にあり、険しい山容で知られる）
に到るかど